東郷村報

第131号

昭和37年9月5日
発行所
宮崎県東旧杵郡
東郷村役場

牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長　黒木松美

現代教養文庫「牧水のうた」に次のように記してあります。

「旅だけが牧水の人生でした。「幾山河」の歌は、青春の日の牧水の胸の底から鳴りいでた人生への求愛のうたなのでしたが、そのまま牧水の一生を象徴しています。また私たちの心にも、日ごろは忘れている人生をよびおこしてくれます人生、そうです、まいにちの生活のなかに、ほのかに見えかくれする孤独のあこがれです。幾山河の、はるかな人生の旅路です。

旅ということばは「たどる日」からきていて「行き行く日」の意味なのです。牧水の一生はそれこそ「行き行く日」の連続でした。ボードレエルの「行かんがために行くものこそ、まことの旅人なれ」の詩と、カール・ブッセの「山のあなたのそら遠く」の詩を愛唱していた牧水でしたから、ことに若い日の旅の歌には浪漫的な旅情がゆらいでいます。

牧水は若いころは海の旅を愛し、中年からは山の旅を愛し、生涯かわりなく愛したのは溪谷をたずねる旅でした。大きく強く静かな自然に没入することが、牧水には人間の根本から考える動機となつていたようです。風光に眼を楽しませるばかりでなく、風景のなかで「眼を瞑じよ」といつています。歌をつくるとは、真実の人間にたちかえるために、自然のなかで心と対話することなのでした。だからこそ牧水の歌は、自然と人生とが交響することばの音楽として、人間の魂のふるさとへの郷愁をいつまでもかなでているのです。」

この牧水先生が逝かれてここに満三十四周年を迎え「ふるさとの」歌碑前に村民が集いまして「牧水祭」をいたしまして先生の偉業をしのびますことは私共東郷村民の無上の光栄でありまた感激の極みであります。

先生の業績が我が国文学史上に燦然と輝いていることは、今更申し上ぐる必要もありませんが、先生に関する著書は毎年のように出版され、坪谷の生家を訪ずれる人も年々その数を増し歌碑も全国到るところに建てられて現在はその数三十を数えています。

かく全国民から敬愛されその秀歌は口ずさまれている牧水先生に対し、本村民の認識はと自問してみますと、聊か「燈台もと暗し」の感も湧いて来ます。

洋の東西を問わず、その国の文化の向上に大きい業績のある人々の遺物遺跡を後世に残すことは、その国民に課せられた名誉ある責務であります。牧水先生の生家をはじめ遺墨遺品、或は先生が幼き日喜戯した山河など保存して我が国文化の進展に寄与することは、先生と郷土を同じくするわが東郷村民にとりましても貴い事業であると信じます。

しかし、このような文化的事業は坦々たるものでなく、幾多の困難が予想されますが、村民各位の深い御理解と絶大なる御協力によりまして、いつの日にかは実現しなければならぬ本村最高最美の文化事業であると確信いたしています。

ここに牧水祭に当りまして所信の一端を述べまして御挨拶といたします。

若山牧水

—ふるさとを訪ねて（長嶺　宏氏執筆）から—

近代日本の短歌史の上に大きな足跡をのこした若山牧水は、明治十八年八月二十四日早朝、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に、医師若山立造の長男として生まれた坪谷は尾鈴山の西のふもとにあるさびしい山村であるその生れた家は、今もその当時のままのこつている。

日豊線富高駅で下車してそこから神門または牛山行きのバスに乗り、一時間ほどすると、牧水生家の前でバスはとまる。家は古びた二階屋で、すぐうしろに山を負い、目の下に大きく折れまがつて流れる坪谷川の急流をへだてて、けわしい尾鈴の裏山を一目で見わたすことができる位置にある牧水はこのふるさとの山川をこの上なく愛した。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り

この歌は今、牧水の生家の裏にあたる山の上の自然石に刻みこまれている。このほかふるさとを詠んだ歌は非常に多い。

日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴れの日や

ふるさとの美々津の川のみなかみにひとりし母の痛みたまふとぞ

母恋しかかる夕べのふるさとの桜咲くらむ山の姿よ

ふるさとの日向の山の荒溪の流れ清うして鮎多く棲みき

明治二十九年三月、十二才で坪谷尋常小学校を卒業するまで、牧水はここで育つた。この時代の牧水は、まつたく自然の児であつた。友だちと一緒に遊ぶよりもひとりで山に登り、谷川へ行つて魚を釣ることを好んだ孤独な少年であつた。少年にとつての友だちは、小さな獣や小鳥や魚や木の実草の実などであつた。牧水は少年時代に学校の教科書以外には、ほとんど雑誌類を読まなかつた。それは坪谷が都市から遠くはなれた山村であつたからばかりでなく、ここの自然が少年牧水にとつて、まつたく夢中になるほどおもしろかつたからであろう。この少年時代のふかい自然愛は、後に牧水の芸術を形づくる一つの大きな原動力となつたのである。

坪谷尋常小学校を卒業した牧水は、さらに高等小学校に入るために、はじめてひとり坪谷をはなれ延岡に出で下宿することになつた当時高等小学校は、延岡まで出なければ他にはなかつたのである。それから明治三十二年三月、高等小学校三年を終わつて、その年、新しく開設された県立延岡中学校に第一回生として入学した。延岡中学校の五年間は、牧水の歌人としての基礎を作つた非常に大切な時期である。この間に牧水は良き先生と友だちに取りかこまれて、次第に短歌への目を開いて行つた。牧水という号は、中学の五年の時はじめて用いたものである

明治三十七年三月、延岡中学校を卒業した牧水は、さらに早稲田大学英文科に入るために上京の途についた。当時は細島から船で神戸へ行き、そこから汽車で東京へ向つたのである。早稲田に入つてからの牧水には、北原白秋、土岐善磨、前田夕暮、正富汪洋などといつたすぐれた文学者の友人ができたが、彼にとつて唯一の親友は武蔵野の自然であつた。

彼は武蔵野の自然のなかに、はじめて自分の生きる場所を見出すことができたのである。そうして、そのことによつて、それまでどうしても、なじめなかつた都会生活——虚栄や名誉や流行や利害などのうずまいている都会生活のみにくさから、はじめて解放されて、まつたく自由な気持で誰のまねでもない自分自身の歌を詠むことができるようになつた。その後、自然に対する見方は、年とともに深くなつて行つたけれども、自然への復帰、融合ということは、どんな場合にも一貫して牧水の芸術の骨格をなしている。彼が生涯旅を好んだのも、まつたくこの自然への融合を願う心からに外ならない。後に大正九年東京を引き上げて、家を沼津の海岸に移したのも、まつたく同じ理由によるものである。

遠白うちひさき雲のいざよへり松の山なる桜の上を

雲ふたつ合わむとしてはまた遠く分れて消えぬ春の青ぞら

こういつた初期の歌が、自然を詠んだ歌であつたことは決して偶然ではない。そうしてこのような自然への融合を願う心の底には、牧水の終生変ることのないふるさとの深い愛情があつたのである。

明治四十年六月、夏休みに入つた牧水はひとりで帰省した。こんどの帰省はいつもの神戸からの船旅でなく、陸路山陽線によるはじめてのコースであつた。その途中詠まれたのが有名な

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅行く

の歌である。今沼津公園と北海道帯広郊外の黒田温泉との歌碑に刻みこまれている。時にわずか二十一才の一田舎大学生であつた。この歌は同じ年の秋ごろ詠まれた。

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

の歌とともに、もつともひろく世間に親しまれている歌である。後の歌は今横須賀市下浦の歌碑に刻まれている。この二首の歌には、青春の永遠のあこがれとわかわかしい生命感があふれ出ている。この年の夏郷里に帰省中、細島から船で途中内海、青島、鵜戸に遊び油津港に上陸した。その時の歌、

楷樹の古樹を想へその葉蔭海見て石に似る男をも

船はでて上れる国は満天の星くづのなかに山匂ひ立つ

後の歌には作者の清純な心情と南国の風物のみずみずしさがよく融け合つているそれから更に野生馬で有名な都井岬まで足をのばしたここで

日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端に独り海見る

という歌を詠んだ。この歌は今都井岬の歌碑になつている。

明治四十一年七月、早稲田大学英文科を卒業した。同じ月に処女歌集「海の声」を自費出版して専門歌人としての第一歩を踏み出した。歌人への道は決して平坦ではなかつた。失望や病苦や貧乏や失恋などの苦難にみちた道であつた。しかし牧水は、どんな苦しみもはねのけて、全力的に生きそうして歌を作つた。

明治四十三年四月、第三歌集「別離」が出版されたこの歌集によつて牧水は一躍歌壇の王者になつた。集中の「幾山河」や「白鳥は」の歌はたちまちのうちに全国を風靡したのであるしかしその成功にもかかわらず、彼の生活はすこしも楽にはならなかつた。楽にならないばかりか、貧乏と病苦の生活はいよいよひどくなつて行つたのである。そういうなかで苦しみあえぎながら、ただ必死になつて歌を作りつづけた。このころの歌に

かなしくもいのちの暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

わが手足われの生命のそのままに今日こそ動け死なむとぞ思う

というような暗い、救いのない歌がみえる。

明治四十五年五月、太田喜志子と結婚した。彼女は後のすぐれた歌人若山喜志子である。彼女との結婚は牧水にとつて新しい生活と芸術との再出発を意味したそれからいろいろつまづきと動揺はあつたけれども、牧水は歌人としての道をたゆみなく歩きつづけ、多くのすぐれた歌を世にのこした。その一部を次にあげてみよう。

いまをかも露のおくらむ夜あかりに長く垂れたる黍の葉の見ゆ

石越ゆる水のまろみを眺めつつこころかなしも秋の溪間に

手にとらばわが手におりて啼きもせむそこの小鳥を手にも取らうよ

うすべにに葉はいちはやなり萌えいでて咲かむとすなり山桜花

昭和三年九月十七日、沼津千本松原の自宅で病気のためなくなつた。まだ四十三才の若さであつた。墓は沼津千本松原の入口にある乗運寺にある。牧水の全業績は歌集十五冊と歌論と紀行文である。今牧水全集十二巻に収められている。その歌が日本の短歌史上に永久にのこるものであることは言うまでもないが、その紀行文もまた自然をこの上なく愛した牧水でなければ書けないような独特な深さと味わいとを持つた名文である。牧水は一生歌に生き自然に生きた、たぐいまれな心の美しい歌人であつた今牧水の歌を刻んだ碑は、ふるさとの宮崎はいうまでもなく、北は北海道から青森、福島、東京、静岡、山梨、名古屋、岐阜、長野、山口、福岡と全国各地に建てられている。われわれはこのようなすぐれた歌人をわが宮崎県人に持つことを大きな誇りとするものである。

牧水祭行事

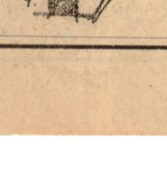
一、学童音楽会　九、〇〇～一〇、三〇　坪谷中学校
二、歌碑祭　一一、〇〇～一二、〇〇　歌碑前
三、記念講演　短歌会　后一、〇〇～三、〇〇　坪谷中学校
四、祝賀会　后三、〇〇～四、〇〇　同
五、学童作品展　九、〇〇～四、〇〇　同

歌は心から出るという。まことに心よりほかに、歌のいずるところはない。

心から出るとともに、同時にまた心を養い育つるような心持で、次第に私は歌をうたつて行きたいものである。

自由で
長閑で

慈愛にみちた歌
私はそれを歌いたい
「ひとりごと」



作品　讃酒歌

真実、菓子ずきの人が菓子を、渇いた人が水を、口にした時ほどのうまさをば酒はもつていないかも知れない。いちど口にふくんで咽喉を通す。その後に口に残る一種の余香余韻が酒のありがたさである。単なる味覚のみのうまさではないむろん口であじわううまさもあるにはあるが、酒はさらに心で嚙みしめる味いをもつている。

あの「酔う」というのは心が次第に酒の味をあじわつてゆく状態をいうのだと私はおもう。この酒のうまみは単に味覚をあたえるだけでなく、直ちに心の栄養となつてゆく。乾いた心はうるおい、弱つていた心はよみがえり、散らばつていた心は次第に一つにまとまつてくる。

私は独りして飲むことを愛する。かの宴会などという場合は、多くただ酒は利用せられているのみで、酒そのものを味わい楽しむということはできがたい。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり

酒飲めば心なごみてなみだのみかなしく頬を流るるは何ぞ

かんがえて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

われとわが悩める魂の黒髪を撫づるとごとく酒は飲むなり

時をおき老樹のしづく落つるごと静けき酒は朝にこそあれ

しかし、心の合うた友だちなどとあい合うて杯を挙ぐる時の心持もまたありがたいものである。

いざいざと友に盃すすめつつ泣かまほしかり酔はむぞ今夜

語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけりいざ酒酌まむ

ふつうは晩酌を称うるが、これはとも すれば習慣的になりがちで味はうすい。私はむしろ深夜の独酌を愛する。

ひしと戸をさし固むべき時の来て夜半を楽しくとりいだす酒

疲れ果て眠りかねつつ夜半に酌ぐこのウイスキーは鼻を焼くなり

鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寝む

酔い果てては世に憎きもの一もなしほとほと我もまたありやなし

ふくみたる酒のにほひのおのづから独り匂へるわが心かも

「酒の讃と苦笑」

比叡山にて

爺さんはやがて膳を運んできた。見れば、私の分だけである。私はしいて、彼自身の分をも、ここに運ばせ、徳利や杯をもとよせ、さつき茶屋から持つてきた四合壜二本を身近くひきよせて、二人して飲みはじめた。

爺さんの喜びようはまつたく見ているのがいじらしいくらいで、私のさす一杯一杯を拝むようにして飲んでいる。ありがたい、ありがたいといいつづけながらやがてはどうせ私も、もう長いことはないし、いつかいちどは思うぞんぶん飲んでみたいと思つていたが、やつぱり阿弥陀様のお蔭かして、今日旦那にあつて、こんなありがたいことはない。この分ではもう今夜死んでも憾みはない、などといいながら眼には涙を浮べている。

今夜死んでもいいなどというのを聞いてから、急にこう飲ませていいかしらと私も気になりだしたのであつたがいつの間にか二本の壜を空にしてしまつた。耳につくのは雨の音である。まだ盛んに降つている。

「山寺」

友よ、歌をうたわん。
わが秋のあかしのために。
いのりのために。

○

われみずからの小さき知恵にたよるなおのれを空しゆしてただ神の前に立て

○

おのれだにきよからば
路傍の草に神を見む
おのれだにきよければ
随所に輝く歌を見る

「ひとりごと」

山桜の歌

私は山桜の花を好む。すべての花のうち、最もこれを愛する。ついでにいつておくが、都会居住の人などにはこの山ざくらの花を知らずにいる人があるかも知れぬ。東京などに咲くのは多く吉野とか染井とかいう種類だそうで本統の山ざくらをば殆んど見受けない。

この桜は花よりも葉の方が先に萌える。その葉のいろは極めて潤沢なあかねをふくんでいる。そしてその葉のほぐれようとするころにほんの一夜か一日で咲き開く花のいろは、近よつて見れば先ず殆んど純白だが、少し遠のいて眺めると、その純白の中に何ともいえぬ清らかな淡紅色をふくんでいる。花のさかりは極めて短く、ほんの二日か三日かであすることなくして散つてしまう。散りはじめたとなれば、それこそちよつとの間をもおかないではらはら、はらはらと次ぎから次ぎに散りついで、ほどなく若葉のしめやかな木となつてしまうのである。

その山桜の木の多いところは、この付近では先ず伊豆の湯が島である。天城山の麓にあたる峡谷で、温泉がある。私はこの二三年来その花の咲くころとなれば毎年かかさずにそこへ出かけてゆく。つぎに引く数首の歌は一昨の春、そこに遊んで作つたものである。

うす紅に葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山ざくら花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花

かきすわる道ばたの芝は枯れたれや坐りてあふぐ山ざくら花

瀬々走る山魚石班魚（やまめうぐひ）のうろくづの美しき春の山ざくら花

つめたきは山ざくらの性（さが）にあるやらむながめつめたき山ざくら花

湯が島はまえにもいうとおり峡谷である。天城の森林から出てきた狩野川のみなかみと根子越の方から出てきた根子谷との落ちあうあたりに温泉が二三か所に湧いているのであるが、その二つの谷のいずれもが山の峡間を深く掘つて流れている。岩から岩のあいだに断間のない瀬を作りながら流れ下つている。その岸にそうて浅い深い林がつづく。その林の中にこの山桜の木が極めて多く立ちまじつているのだ。花のないときはさほどにも目だたぬが、一朝咲きはじめたとなると、まつたくめざましいくらいだ。

岩かげに立ちてわが釣る淵の上に桜ひまなく散りてをるなり

山ざくら散りしくところ真白くぞ小石かたまれる岩のくぼみに

今朝の晴青あらしめきて溪間より吹きあぐる風に桜ちるなり

これらは谷間の桜を詠んだものである。ここの谷は地味のせいか、すべての樹木がよく茂つている。木の間の桜の清らかさ美しさはまた別である。

朝づく日うるほひ照れる木がくれに水漬（みづ）けるとどき山ざくら花

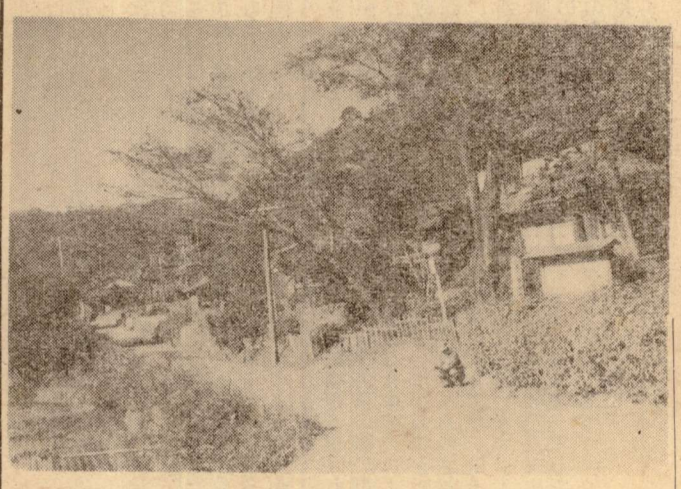
峰かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山ざくら花

とほ山の峰越の雲のかがやくや峰のこなたの山ざくら花

付近に、また、萱山も多いそしてまたどうしたことかこの桜の木だけが伐り残されているのにおりおり出あう。あたりいちめんの枯萱の中に、この木の花がひつそりと日光をふくんで咲いているのもまた寂しい静かなものだ。

萱山にとびとびに咲ける山ざくら若木にしあれやその葉かがやく

「山桜の歌」



古城のほとり

小諸町では、島崎さんの「小諸なる古城のほとり」の長詩で名高い懐古園に入つた。

そして壊れかけた古石垣の上に立つて望んだ浅間の大きな裾野の眺めは、さすがに私の胸をときめかせた。

林の中には、松にまじつた栗や、胡桃が実を落していた。

・かたはらに秋くさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな

城あとの落葉に似たる公園に入る旅人の夏帽子かな

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあそぶかな

胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤とんぼ等が来てものをいう

死か芸術か

わが生は
わが芸術に尽き
わが芸術は
わが死に尽く

空想をやめよ
火の如き瞑目を破れ
庭に出でよ
五月の日は青く煙り

樅の蔭に蟻這入れり
孤独なる青き太陽を仰ぎ
悲哀に満てる地の上に
涙かき垂れ

われ今日も藻掻き苦しむ
つねに絶望す
われ　若ければなり

日記

明治三十六年（延岡中学校四年時代）

一月一日　晴　暖

明治三十六の初日、愈々今日ヨリ起レリ、何トナク心改マレル如キモ興アリヤ独立新聞来ル、二十四頁ノ大サナリ、見ル可キハナシ

氷花兄ノ歌デタリ

昼ヨリ稔ヲ供ニ、後山ニ山芋ヲ掘ル、得ル所三百五十目

○年たちし十戸の村の曙を村に一つの鐘高うなる

○ただ一人新発意こまを遊びけり人里遠き寺の門松

○ことほぎのみ旗かゝげし大船の帆柱高く初日さしのぼる

○日の本の平和ここにたちそめし高千穂峯の春のあけぼの

田園のお正月淋しさかぎりなし

○百一のつゝのひびきの消えぬまを海原とほく初日さし出ぬ

一月二日　うすぐもり　寒　風

新年の賀状来る事しきりなり、風荒み、空さへ曇りて予定の山芋ほりも叶はず八犬伝など見る、蹤々として目を消す

春江兄より年賀状の末に一首添へ来る「歌になん読みみてや見むと思へども、あの清らけき朝日子の影」

春江兄は、頃日、大内の姓をやめて、鈴木とか云ふ親戚へ養子に行かれたりと

○松の香り朽木の薫り身にしみてうなだれ勝の桧小笠よ

一月三日　快晴　暖

相変らず事も無く暮す、快晴にうかれて、山芋をあさりたれど途中に眼を傷めて、獲物多からず

○野の花の芳き香をかぎし夕べより日毎にたどる道うつくしき

○巌かげに磯草あつめ焚火して夫まち居れば月ほのめきぬ

一月四日　曇　寒

頭すこし重き心地す、天気の故なるべし、矢張事もなく暮らす。

延岡の桂嵐君より野虹会の兼題を報じ来る

「麦、大根、兎、密柑」の五つ、早速首を傾けたれど出来たるは少し。夕方浮かれ節かたりの酔人寄り来りて、興を醒す。尾鈴の山に雪ふるを見る寒き日なり。

○駒ながら烏帽子はねて鶏を見る（仰ぐ）梅の御苑の有明月夜

○彩なして東路させる峯の雪に大根ひく手のふとたゆたいぬ

○詩筆を焼いて肥料に作りたる李白が麦ははや芽だちたり

（五句に　春の風吹く）

○簪たいて太刀とぐ翁骨高し白ひげながし白梅月夜

○柴を樵る鎌の手とめて仰ぎ見る雲に思の行え知らずも

外に新体詩めきたるを作り見る、泣菫の「ゆく春」藤村の「一葉舟」などを見る

一月五日　快晴　暖

明日出郷せむ用意す、夕方、矢野捨吉君帰村セラレ米良地方ニ在リタリと、桂嵐へ面白き端書を送る。昼過ぎ、浄瑠璃語り来る。菅公を物語る。

○梅園を東にひろき麦畑のみなもえ出でて春の風ふく

一月六日　曇　大寒

暁、家を出で、行く、さすがに、嬉しき心地もせず山陰にて氷花兄と、二時間程も話す、それより馬車にて五時、延岡着、車中の寒さ酷また烈し

延岡の方にも変りたる事なし、夕方買物、柳沢町へ出で大見君宅に到るに桂嵐子は細島に行きて在らず。夜花会を行う、国文学来り居りたり、わが歌、佳調の部にありき。

一月七日　晴

午頃、春江君来訪、久しく友無きに苦しみし事とてなかなかになつかしく、歌文の話、すこぶる旺んなり

野虹会の事など談ず。

午より翠村、桂嵐子を訪ひたれど、皆不在、直ちに帰る。然るに三時頃翠村君来訪、亦、談話盛なり、夜山崎君宅を訪はむを約す。

夜翠村君を訪ひ、山崎君を訪ふ、宅に在らず、春江君の宅に赴かれしを聞き、直ちに其処に到り、四人火鉢を囲んでそれぞれの談話旺盛を極む。のち高木君も亦来り加はる。辞せしは十時、帰路写真屋に寄りて、看板なりしわが写真をとり来る。

○笛置きてみ簾あぐるおぼろ夜をねむるに似たり春の遠山

○春風のそと吹きあげしみ簾のすきまもりくる花吹雪かな

一月八日　晴

九時に登校す、始業式あり、終りて、野球を見る。

十二時帰宅す

山崎君より永井荷風の「地獄の花」を借りて読む。なかなか面白き書なり、せちからき浮世の浪にもまるる一処女を描き出して甚だ妙!!

○勝軍ほぎてさかもる幕のうちに桜ふきまく夕あらしかな

○興いでて桜めでます公達の衣の紅きに風ゆるく吹く

○塔きざむ槌のたえまに人げなき野茶屋の桜夕吹雪する

○鞭あげて若殿原が駒ならす馬場の桜に夕月のかげ

夕方大見に到りて、青年界新手腕を見る。夜門馬君来訪　花合旺んなりき

一月九日　曇小雨　中

放課後　寒稽古の事を達せられる。

夕方、猪狩君来訪、共に彼の父君のもとへ（日野屋）連れ行かれ、非常の馳走を受く、その帰路、大瀬橋際にて「郵便切手」など売る店に立ち寄り葉書を求めむとせしに、其家に火起りて近隣の人悉く集へり、幸に大に到らずして止む。青年議会の原稿など認む。

一月十日

寒稽古、今日より始まる出席す、寒さ、冷たさ、蓋し言の及ぶ所にあらずかし

国文学の臨時増刊及び議事録来る。国文学甚だ美しく議事録にわが短文出たり。

野虹会の詠草兼題、前の分を撤回して、新に定む「春風、春雪、春雨、梅、たこ」の五つ

門馬君と入浴す

寺沼君、夜来訪、未来の談話さかんなり。

○溪の月に梅めでたまふ女御たちの紅き裳裾にあはき雪ちる

○菜の花や桃や桜やふくませて霞に消ゆる里の春風

○柴こりて白梅かざし野の月に帰さちちちら雪ふり出でぬ